

青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

生徒総会を見て 感じたこと

先日、生徒総会が開かれました。総会に向けての学級討議を経て全校での会を体育館で行いました。

この会の目的は冊子によると、①話し合いを通して会員である自覚をもとう②今後の活動について見通しをもとう、の二つです。

発言の声が小さい場面もみられましたが、緊張しながらも責任をもってクラスの意見を発表している人が多かったと感じました。

議長や受け答える生徒会役員は、臨機応変に対応しなければならず、とても大変だったと思います。難しさに負けず丁寧に議論を重ね意見を引き出そうとする頑張りが見られました。

準備運営に尽力した三年生、公の場で積極的に発言した皆さん、また議論に参加した皆さんも含め、お疲れ様と言いたいです。今後議題に上がったことについて

の話し合いが行われることとありますが、少し気になることもありました。

総会でも話しましたが、この会は自分たちの生活を良くする「提案」を行う場であって、学校や生徒会に「要求」する場ではないということです。また時間が十分ではなくスッカリとはいかない場面もありました。

話し合い、皆がある程度納得する「最適解」や「納得解」にたどり着くには、時間と手間がかかるのだと皆で共通認識をもちましょう。私たちが暮らすこの日本では、民主主義国家ではその認識のもと、粘り強く話し合う、つまりは対話を重ねることが根底にあるのです。

校則について、問いかけたのは「本当に自分達だけで正しい判断ができるのか」です。二三年生は昨年の全校対話の授業で多面的・多角的に見る経験をしています。「校則を変える」として生徒・教師・保護者・地域・高校・卒業生など様々な立場から検討してみましよう。そして青嶺ブランドを刷新し、胸を張って公の場に出られるようバージョンアップしましょう。

弟から学んだ

二つ年下の弟はルアー（疑似餌）の開発者です。見た目がけっこう似ていて兄弟だとすぐわかるそうです。中身はかなり違っていておおざっぱな私と違い彼はとことん物事を探求する姿勢があります。

絵画や制作に能力を発揮する姿を幼い時から見ていて、なんでも卒なくこなすけれど突出した分野をもたない私は羨ましく感じていました。

大学時代、私と入れ替わりでオーストラリアに渡り、バイクも引き継いで旅をしました。共通の経験や仲間ができたところからは兄弟というより友人というか仲間みたいな関係になりました。

水産大学校で養殖の研究と勉強をした彼は釣り具のメーカーに就職しルアーの開発者となりました。その後仲間と共に会社を立ち上げ、中国で

仕事をしていたとき、南半球でとても売れたヒット作を開発したのですが、どこでそのルアーをテストしたと思いますか？

それは自宅のお風呂場だったそうです。まだ釣りが一般的ではなかった当時の中国では川でのテストは警察の取り締まりなどがあり、ほとんどできなかったそうです。たとえできたとしても、濁った水でルアーの動きが確認できなかったとも言っていました。

狭い風呂場での開発のカギとなるのが「物理」だそうです。南半球で一般的に使われるボートの大きさから推測される海面との距離と釣り竿の長さ、投げた後の引く角度と強さなどを計算して、繰り返し風呂場でルアーを動かし改良を重ねていったそうです。以前、バイクが壊れたときに役に立つのは「数学」だと書きましたが、室内でルアーを開発するのに役立つのは理科の「物理」なのです。

私はそこに人間の「想像力」を加えたいです。中国で狭い風呂場の中に居ても、太平洋上で海に向かってルアーを投げ、魚を誘う動きをイメージできるその想像力と感性が大事なのではないでしょうか。

彼と話していて「水の中がみえる」と言っていたことがありますが、それは数々の経験と膨大なデータから、魚の動きや活性が想像でき、どこに魚がいるのかを予測し釣り上げることができるという自信から言える言葉なのでしょう。自然を相手に知恵を絞って魚を釣る、幼いころから目標にしていた「釣りで食べていく」ことを実現できた弟は幸せでしょう。

夢や目標をもっている人はその実現のために何から始めるか、それはまずは「勉強」です。どういう道を辿れば自分がなりたいものに近づけるか、調べる方法はたくさんあります。自分の人生の航路は自分で決め、そして自分の力で進んでいきます。実現へと引く張るエンジンが「勉強」です。

校長室より

5・6月は様々な会議に出席します。伊万里勤務も三年目になると、顔見知りが増えて色々と声を掛けられます。和やかに言葉を交わしていると、来た時には、誰一人知り合いがいなかったことが信じられませんか。人と地域に恵まれた幸せを噛みしめつつ、受けた恩をきちんと返したいと思っています。